

多民族社会で各民族集団の民族性を重視する文化多元主義が、日本でも、多様性の代名詞に使われ始めた。

文化多元主義の欧米での争点は、各民族集団の文化を横並びに重視する勢力（以後、横並び派）と、各民族集団の文化を認めつつも、究極的には主流派民族集団の文化への参入を重視する勢力（主流化派）との確執である。アメリカだと横並び派がアフリカ系とヒスパニック、主流化派がワスプ、ユダヤ系、ホワイトエスニック（主にカトリック）だ。

右のパターンは、文化以上に多元化が困難な宗教にも波及した。キリスト教始発で、各宗教横並び重視型の多元主義が主張され始めたのだ。

元来、経済活動と科学はボーダーレスな活動だが、文化や宗教はボーダー設定が前提になる。従ってこれらの領域でのボーダー外しは、体制内革命に近い荒業が不可欠となる。文化多元主義はその荒業だった。

本書は、このキリスト教始発の横並び派、つまり一九八六年に宗教間対話を行ったグループと彼らの成果

宗教横並び派を批判 主体性の護持を主張

である論集『キリスト教の絶対性を超えて』（邦訳・春秋社）を、キリスト教の主体性放棄及びその不毛な相対化として批判し、各宗教の主体性を認めつつも、結局はキリスト教の主体性護持を主張した論集だ。

本書の論者らは宗教の主流化派だが、文化多元主義の主流化派と違うのは、キリスト教以外の宗教の信者を究極的にはキリスト教にへ主流化させる主張はしていない点である。その点、本書の論者らは文化多元主義の主流化派より控えめだ。ガンジーら他宗教の指導者にキリスト教が与えた影響をこの宗教の主体性の表れとして重視する半面、他宗教との対話を通しての「キリスト教の絶えざる自己批判」を唱える。

宗教の横並び派批判には、各自気に入った神のイメージだけを自由に選択してよしとする同派を、消費者の選択の自由を絶対視する「消費社会のエートス」とダブらせるレスリー・ニュービギンの「市場社会の宗教」など、示唆に富んだものが多い。

それにしても、本書を読むと、欧米などの一神教会では文化多元主義が多神教的エートスの代用であることが改めて納得がいくのである。（明大教授）

キリスト教は他宗教をどう考えるか



（森本あんり訳、教文館・330頁・3,500円）
Gavin D'Costa 西
ロンドン高等教育機関
上級研究員。ほかに神
学者・哲学者ら計10人
が執筆した。